

## 編集後記

ここ十数年来の傾向だと思うが、紀要を始めとする学内誌に査読制を導入する大学が増えてきた。本年報もその例外ではない。かつて紀要と言えば、査読無し、投稿原稿をそのまま掲載するというのが一般的であり、査読と言えば学会誌に固有のハードルというのが大方の見方だったと思うが、徐々にそうした認識も成り立たなくなりつつある。

なぜ、かくも多くの大学が学内誌に査読制を導入するようになったのか。その理由の一つは、言わずもがな投稿される論文の質的向上を図るためである。第三者による評価を挟むことで、当該研究の新規性や独創性、有用性について検証が加えられ、結果、論文のクオリティは向上する。少なくとも、建前上はそういうことになっている。第二の理由としては、近年、その導入が積極的に推奨されつつある人事評価の一環として、教員の個人業績のなかでも特に研究業績に関して、査読付である方が高いポイントを得られる、というものである。研究業績の多寡が研究者人生を左右すると言っても過言ではない熾烈なアカデミズムの世界にあって、いかにしてポイントの高い業績を量産していくかは、とりわけ任期付やテニュアトラックが多数を占める現代の大学教員にとっては喫緊の課題である。その際、インパクトファクターの高い有名ジャーナル（理系であれば『ネイチャー』や『サイエンス』など）を頂点とするヒエラルキーの中で、これまで比較的下層に位置付けられてきた学内誌の価値を査読の導入によって高めるというのは、この世界の必然的な流れであるのかもしれない。

そもそも査読（peer review）というのは、文字通り仲間（peer）による論評（review）であり、その場合の仲間とは、通常、研究領域を同じくする専門家を指す。その限りで言えば、学会誌は特定の専門領域にかかわる専門誌であるから、比較的、近接領域・テーマの専門家に査読を依頼しやすい。翻って、学内誌の場合はどうだろうか。大抵の場合、大学は専門領域を異にする研究者集団によって構成されているから、研究領域を同じくする人間はほぼ皆無に近い。となれば、学内のマンパワーだけで査読を完遂しようとする、論文内容の当否にまで踏み込んだ審査は、概して困難なものとなる。もちろん、他領域の専門家による批評が、新たな分析視角を提供し、研究の学際性を高めることがあることは否定しないが、多くの学内誌における査読（と称しているもの）は、研究の方法論に関する指南や論文形式に関する指摘、あるいは誤字脱字の修正にとどまっているというのが実情ではないだろうか。

以下は編集委員の総意ではなく、あくまでも編集委員長の個人的な意見として読んでほしい。本学で刊行している研究誌（『研究年報』、『子ども学』、『紀要』、『情報教育研究』、『教職課程研究』）はいずれも査読制を採用している。このことの適否について、個人的には何媒体か査読のない雑誌があっても良いのではないかと考える。この提案が含意するのは、以下の2つである。

まず一つ、査読は校正ではないということである。本年報には、『研究年報』に関する規程と『研究年報』投稿要項の2つが存在しており、執筆者にはこの規程と要項に従って投稿するよう繰り返しお願いしている。にもかかわらず、これらの約束事が十分に守られていないケースが散見されるのはどういうわけか。加えて、誤字脱字についてもほとんど推敲の形跡が見られない論文も見受けられる。査読者は校正係ではないのである。自ら推敲しなくても査読者がチェックしてくれるだろうという安易な考えがあるのであれば、そのような査読など止めてしまった方が良い。むしろ査読を止めた方が、自己の責任において丁寧に執筆しようという気概も芽生え、結果として、逆説的ではあるが論文のクオリティも高まるのではないか。論文執筆は途方もない産みの苦しみを伴うものであり、だからこそ愛着も生まれる。研究成果を活字として公表することの重みと自らの生産物に対する矜持と愛情を持ってほしい。

二つ目は、査読という介入がバタナリスティックな要素を孕むことにより、自由かつ創意ある研究活動が妨げられるのではないかとことだ。先述したように、学内誌の場合、多くは異分野の専門家が査読にあたることになる。研究領域が異なれば、方法論も執筆作法も異なるのは当然だが、それに起因して論文の

---

優劣にかかわる査読者のバイアスも生まれやすくなる。スピーチ・コミュニティ（学会）が異なれば、同じ論文に対する評価も 180 度異なるといったことは往々にしてあることである。

ところで、こうした事態は、執筆者をしてある種の萎縮効果をもたらすことになる。査読者に付度し、どの領域の専門家にも理解してもらえるよう、できるだけ角の取れた（規格化された≡小粒な）論文の作成に専心するようになる。これは査読者にも当てはまって、当該研究が斬新かつ新奇なものであっても、その判断ができないがために、良かれと思って必要のない修正意見を付してしまうことがある。投稿者としては、リジェクトという事態を避けるべく、査読者の修正要求に付きあって一つひとつ丁寧に応じることになる。結果として、その論文が持つ“良さ”が失われていくことがある。

ここで、投稿される方々に一つお願いがある。当たり前のことではあるが、仮に修正意見が付されたとしても、了解できないものであれば修正に応じる必要はない。きちんと丁寧に根拠を示して、理路整然とリプライしてくれば、おそらく査読者も納得して修正要求を取り下げるだろう。

以上、苦言および批判めいたことばかり書き連ねてきたが、もちろん学内誌の査読制に多くのメリットがあることは否定しない。しかし一方で、学内誌には学会誌にはない本来の存在意義があるように思う。その意義というものが査読によって損なわれるとしたら、非常に残念な気がしてならない。たとえば、学会誌に投稿するには大風呂敷にすぎるテーマや逆に概念定義だけを事細かに延々と論じるような研究、あるいは人文系に多いケースであるが、50 枚では論じきれない壮大な研究テーマをナンバリングして何本かに分割し投稿する（サラミ出版のことを言っているのではない）などに対して、学内誌査読はもう少し寛容であるべきだと思う（もっともこれは査読の問題ではなく、投稿規程を変えれば良い話なのかもしれない）。

査読は、論文の真正さやクオリティに対するお墨付きではない。もとより学内誌の査読はお墨付きを与えるどころか、前述の理由により論文の細部にまで踏み込んで評価を下すことは困難なのであるから、ここはいっそ校正だけに止めてしまえばどうだろうか。これに対して、それでも査読を廃止することに抵抗を感じられる方もおられるに違いない。学内誌はその大学の知的レベルを表すものであるから、期待する水準以下の論文が出てくることに懸念を示される方も多くおられるだろう。これに対しては、執筆者に対して刊行後に研究成果報告をお願いし、侃々諤々の議論を戦わせる事後検討の機会を設ければ良いだけの話である。これを繰り返していけば、自ずと個々の研究は鍛え上げられていき、学内誌の水準も上がっていくだろう。

ここまで書き進めながら、ふと院生時代のことを思い出した。あの頃は、研究会がある度に第二ラウンド（ほぼ毎回、第三ラウンド以降、朝まで続く）と称して、近くの飲み屋でそれこそ喧嘩と見紛うばかりの熱い議論を繰り広げていた。それでも不思議と仲が悪くなることはなかった。皆、自分の研究に信念を持って取り組み、“本気”で研究に打ち込んでいたからである。大学はアゴラであるべきである。学会と違って、専門領域や研究バックボーンの異なる者同士が集うのが大学である。その利を活かさずに、どうして学問の府としての飛躍が望めるだろうか。

『研究年報』第 23 号をお届けします。上記の提言も含めて、忌憚ないご意見をお寄せいただければ幸いです。

（須川公央）